

良寛と貞心尼

昭和六十一年八月二十日から足かけ四日の予定で、念願の越後の良寛遺跡探訪の旅に出かけた。一行は、王朝文学の会の有志十二名に私を加えた十三名のほかに、現地で終始世話をかけることになる、新潟大学教育学部の大橋勝男教授を合わせて総勢十四名となった。出発を前にして私は、長い間の宿願がやっと叶えられることになったことを思い、今回の旅行だけでなく、王朝文学の会の運営について、いつも幹事役として骨折ってもらっている安宗伸郎君に、改めて深く感謝した。

さて、思い返せば、今から二十数年前、札幌で開かれる和歌文学会に出かけた時のことである。往きは、故斎藤清衛先生のお供をして、上野から青森行き東北本線に乗ったが、帰りは斎藤先生と別れて、日本海沿いを走る羽越本線などによるコースを選んだ。季節は十月の、よく晴れた日であった。私が乗ったのは、大阪行きの急行であったが、乗客も少なく、車内は閑散としてい

た。右に濃紺の日本海を見わたし、左に深秋の彩りに映える山野の景色を眺めながら、満ち足りた思いであった。窓を開け放つと、野面をわたってくる風が、興奮にほてる頬に快くあたった。私は、このような快適な独り旅ができることを、何物かに感謝したい思いに駆られた。

そもそも、私がこのコースを選んだのは、ほかでもない。越後の国上山くがみやまの五合庵に住んだ良寛の、つぎの歌が記憶にのこっていたからである。

秋風になびく山路のすすきの穂見つつ来にけり君が家辺に

良寛の人柄と北陸の風土とが一つに溶け合って、清らかなリズムを奏でているこの歌は、一度読んだら忘れることのできない、不思議な力を持っている。いつかはこのような景観を自分の目でたしかめたいという願望が、若い頃の私の胸に芽生えたが、その機会を得ないままに時が流れたのであった。幸いに、今度の旅でその願望が叶えられそうになった。

私の乗った列車は、いずれは国上山のある越後平野を走るはずである。しかし、その時を待たず、能代平野・秋田平野と進むにつれて、幻に描いてきた景観が、つきつきと展開した。穂の出そろったすすき野を、秋の太陽がくまなく照らしていた。銀色にかがやきながら、片寄りになびく穂波の美しさは、はっと息をのむほどであった。帰路にこのコースを選んだことに、私は満足した。

しかし、この時はどこまでも、急行列車の窓越しの瞥見に過ぎなかったが、それがかえって、良寛への思慕を駆り立てることになり、いつしか逃れられない執心に変わっていった。昭和六十年夏の越後行きは、この執心を一気に解き放ちたいという、私の身勝手な発意に、若い諸君の賛成を求めた嫌いがあつたことは否めない。いつもの伝である。

○

前置きが長くなった。良寛遺跡探訪のスケジュールは、凡そつぎのようなものであった。

第一日——新幹線で新大阪まで行き、そこで寝台急行「きたぐに」に乗り換えて新潟まで（車中泊）。

第二日——新潟駅からマイクロバスで、白秋砂山碑・会津八一記念館・新潟大学・弥彦山・与板町を経て、良寛の誕生地出雲崎の良寛堂・良寛記念館・光照寺（良寛剃髪の寺）の見学を終え、三島谷温泉永久荘泊。

第三日——和島村の木村家（晩年に身を寄せた所）・隆泉寺（良寛の墓所がある）・分水町の歴史民俗資料館等の見学をすまし、最後に国上山の五合庵・国上寺・乙子神社を訪れ、その夜は、三島郡寺泊の照明寺泊。

第四日——照明寺境内にある密蔵院（良寛仮寓の所）等の見学をただけで、帰路の上野行きの上越新幹線の長岡発車時刻に合わせるために、見学予定地を一部割愛せねばならなかった。夕刻広島着。

見学スケジュールの一部を割愛したといったが、その一部とは、実は、出発前に読みあさっていた良寛関係書のなかに、水上勉氏の『良寛を歩く』（昭和六十一年三月、日本放送出版協会刊）が入っていた。水上氏には、すでに昭和五十九年に中央公論社から出していた好著『良寛』がある。良寛の研究書はおびただしい数に上るが、この両書から私は、良寛への水上氏のみならずぬ篤い心寄せを感じ得た。われわれが越後の旅に出かけた年の春刊行されたばかりの『良寛を歩く』の middle に、「越後に還る——郷本」なる一章がある。前著の『良寛』にも郷本（ごうもと）のことは出ているが、特にあとから出たこの本を読んでから、今度の旅行では是非この郷本、母のおぶ（従来秀子の名で伝えられていたが、最近磯部欣三氏の『佐渡国略記』の記述にもとづく丹念な考証の結果、「秀子」でなく「おのぶ」とするのが正しいとされる新説による）の生国佐渡が島が真向かいに見える郷本の海岸に、是非一度立って見たいと思っていたが、組まれた旅程ではそれが無理なことが分かり、あきらめざるを得なかった。諸国放浪の旅を終えた良寛が、寛政八年（一九七六）三十九歳で越後に帰った時、最初に身を寄せた仮の宿が、その海辺にあった塩焼き小屋であったと伝えられるからである。良寛がなぜ、自分に代わって跡をついでいる弟由之

の住む実家のある出雲崎を素通りして、そこから寺泊へ向かって北上する一本道の途中にある郷本に仮の宿をとったのだろうか、という疑問が、いつのまにか私の内部に動かしがたいものとなっていた。良寛自筆歌稿の『布留散東』のなかに、

くにかみにてよめる

きて見ればわがふるさとはあれにけりにはもまがきもおちばのみして

という詠が見える。後に国上山に住むようになってからの作であるが、十数年ぶりに故郷に帰った時の印象が、強烈に残っていたものと思われる。母の死は天明三年（一七八三）、後に述べるように、良寛が備中玉島で修行中であつたが、その死の場はもとより、葬儀に立ち会つた証拠もなく、三回忌に帰郷したともいうが、真否は不明である。

良寛の母、おのぶは、佐渡相川の山本庄兵衛の娘、出雲崎の同族橘屋山本新兵衛の養女となり、与板の新木次郎左衛門（排号以南）を迎えて婚姻、その時次郎左衛門二十歳、おのぶ二十一歳であつた。栄蔵（後の良寛）以下の子女が二人の間に生まれた。

栄蔵二十二歳の安永八年（一七七五）五月、来越した国仙和尚に従つて得度、僧名大愚良寛となり、国仙の住持する備中玉島の円通寺に赴き、修行に専念することになる。栄蔵はすでに安永四年十八歳の七月に、出雲崎尼瀬の光照寺で剃髪していた。良寛となつて心新たに、玉島へ向か

うため、父母に別れを告げた時に詠んだという長歌の自筆詠草が伝わっており、所蔵者は渡辺秀英氏ということであるが、今は「谷川敏朗氏写しによる」とされる水上氏の『良寛』での引用に拠らせてもらうことにする。

題しらず

うつせみは 常なきものと むら肝の 心にもひて 家をいで うからをはなれ 浮雲の
雲のまにまに 行水の ゆくへもしらず 草枕 たびゆく時に たらちねの 母にわかれを
つげたれば 今は此世の なごりとや 思ひましけむ 涙ぐみ 手に手をとりて 我面を
つくづくと見し おもかげは 猶めの前に あるごとし 父にいとまを こひければ 父
がかたらく よを捨て すがひなしと 世の人に いはるなゆめと いひしごと（マゴ） 今も聞
ごと おもほえぬ 母が心の むつまじき 其むつまじき み心を はふらすまじと 思ひ
つぞ つねあはれみの 心もし うき世の人に むかひつれ 父が言葉の いつくしき こ
のいつくしき み言葉を 思ひ出ては 束の間も 法の教へを くださじと 朝な夕なに
いましめつ これのふたつを 父母が かたみとなさむ 我いのち 此世の中に あらむか
ぎりは

「もし」は古代東北方言で、「持ち」と同意である。母の「むつまじきみ心」と父の「いつくし

きみ言葉「この二つを、「我いのち此世の中にあらむかぎりは」、「父母がかたみとなさむ」と、やさしい母の「心」と、厳しい父の「言葉」を、しっかりとわが身におさめて、故郷をあとにしようとする、二十二歳の青年良寛の心意気が、ひたひたと伝わってくるような気がする。

母おのぶの死は、前記のように天明三年であるが、父以南は、それから十二年後の寛政七年（一七九五）、京都桂川に入水、謎の自殺を遂げている。良寛が、北陸道を経て故郷に帰ったのは、その翌年のことである。

○

日本古典文学大系所収の「良寛自筆歌抄」に、弟由之にあてた「このころ出雲崎にて」と題する和歌二首がある。大島花束編著『良寛全集』によると、つぎのようになっている。

たらちねのはゝがかたみとあさゆふにさどのしまべをうち見つるかも
いにしへにかはらぬものはありそみとむかひに見ゆるさどのしまなり

この二首は、良寛が越後に帰ってから後の、「さどのしまべ」の見える海岸で詠んだもので、すでにその「しまべ」を望見することが日常のものとなっていることを、その措辞がおのずから

に語っているように思う。「出雲崎にて」とあるところから、良寛が、その生家と母の墓所のある出雲崎の浜辺に立った時の印象がとりわけ深いものであったことは、いうまでもなからう。これらのことを総合してみると、この二首は、「むかひに見ゆるさどのしま」を心におきながら、出雲崎も含めて、郷本の空庵を飯の宿と定めた頃までを、大まかに言ったものと見るのがよからう。

ところで、私がなぜ「郷本」にこだわるのか。越後旅行に出る前に、その準備のために、水上氏の『良寛』、より直接的には『良寛を歩く』を読んで以来、十七年ぶりに帰ってきた良寛にとつて、弟由之が守っていた生家の橘屋は没落も甚だしく、到底そこに身を落ちつける気になれなかつたという水上氏の推測は、一応の理由を衝いているとはいへ、それだけではまだ十分納得のいかないものがある。出雲崎を素通りに近い状態で通り過ぎたかも知れないが、良寛の目は、寺泊に向かう海岸沿いの一本道を歩きながら、「ありそみ」の向こうに横たわる母の生国「さどのしま」の姿を、左方はるかに追いつづけたに違いない。たまたま、寺泊港の手前の郷本まできた時、岸から海に突き出た砂浜に、住民が塩焼き小屋に使ったらしい空き小屋があったので、そこを飯の宿として、しばらく身を寄せることにしたものとと思われる。实地見分してきた水上氏が、「国道ぞいにきて、北へ向って右手にその庵跡をしるした石碑が建っているのだが、事實は、いまの道路から海中へ十メートルばかり入ったところで、そこに塩焚小屋があったらしい」としているの

に従わねばなるまい。それにしても、水上氏が立ったであろう、その場所に、私も立ってみたいと思つた。それはなぜであらうか。出雲崎と同じく佐渡が向かいに遠く望まれるとしても、その方向から打ち寄せる潮をわが足下に直に感じたであらう良寛を想像することが、私には必要だったのである。

ところで、良寛が栄蔵といつた少年の頃、大森子陽塾の学友であつた橋昆崙の著『北越奇談』は、郷本空庵での良寛の暮らし振りを記す唯一のものとされるが、そのなかに、「其居出雲崎を去ること纔に三里、時に知る人在、必橋氏某ならんことを以、予が兄彦山に告ぐ、彦山即郷本の海浜に尋ねて、かの空庵を窺ふに、不居。只柴扉鎖すことなく薜蘿相まとふのみ、内に入りて是を見れば机上一硯筆、炉中土鍋一ツあり、壁上皆詩を題しぬ。…後行く所を知らず、年を経てかの五合庵に住す」とある。郷本の仮庵を去つた時期も不明であるし、それから五合庵に住むまでの良寛の足取りについて、『北越奇談』の記す所もこれ以上には出ない。『良寛全集』の「年譜」の寛政九年（四十歳）には、すでに五合庵に住んでいたことが、『原田鶴齋遺稿』によって証されるのであるが、それまでは、国上山麓の諸処での行乞・仮住の月日があつたと想像される。ただ、五合庵に住むようになってからも、寺泊の密蔵院、野積のづまの西方院その他一所不住の生活があつたと想像され、五合庵に定住するようになったのは、文化元年、四十七歳の頃と見られる。ここにはじめて安住の場所を得た良寛は、心境いよいよ清すみまさり、人生の至妙境に到達したのである

が、その五合庵も、次第に進行する老衰のために、坂道の登り下りも困難となったため、その麓の乙子神社境内の草庵に移った。時に、文化十三年（五十九歳）であった。さらにその十年後の文政九年（六十九歳）、三島郡和島村島崎の素封家木村元右衛門の好意により、その屋敷内の空き家が改造されて、そこに移ることになった。良寛の最後の住み家となった所であるとともに、本稿のテーマである貞心尼との出会いの場ともなるのである。

○

貞心は越後長岡藩士奥村五兵衛の娘で、俗名をます子という。寛政十年（一七九八）に生まれ、十七、八歳で、北魚沼郡小出の医師岡長温に嫁したが、五年の後夫に死別したため、刈羽郡柏崎の曹洞宗洞雲寺の泰禅和尚について剃髪し、尼になった。良寛をはじめて島崎を訪ねたのは文政十年（一八二七）、良寛七十歳、貞心三十歳であった。あいにく良寛は留守であったので、持参の手毬に歌を添えてのこして帰った。詞書によると、貞心は良寛の手毬好きであることを知っていて、修行の合間に心こめて作ったものであろう。その時の歌と、それに対する良寛の返しとを左に記す。（以下、両者の間に取り交わされる歌の引用は、すべて良寛没後の天保六年（一八三五）、貞心の手によって成った『はちすの露』によるものである。ただし、ここでは、便宜上、

日本古典文学大系九三「近世和歌集」所収のものによることにする。）

師常に手まりをもて遊び給ふときとて奉るとて 貞心尼

これぞこのほとけのみちにあそびつゝつくやつきせぬみのりなるらむ

御かえし

つきて見よひふみよいむなやこゝのとをとをとおさめてまたはじまるを

二人のなみなみならぬ心の交流を、すでにうかがわせるものがあるが、つづいて『はちすの露』には、つぎの初対面の贈答歌がくる。

はじめてあひ見奉りて

貞

きみにかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬゆめかとぞおもふ

御かえし

師

ゆめの世にかつまどろみてゆめをまたかたるもゆめもそれがまにまに

安田靱彦画伯の「良寛貞心初対面の図」は、この贈答歌のイメージするものを靈妙に描きとった名画である。「それがまにまに」は、そのまま、それでよいのだ、の意である。

これをきっかけに、二人の交情は日増しにこまやかとなり、贈答歌もその密度を増してゆく。

任意抄出しみる。

ほどへてみせうそこ給はりけるなかに 師

きみやわするみちやかくるゝこのごろはまでどくらせどおとづれのなき

御かえしたてまつるとて 貞

ことしげきむぐらのいほにとぢられてみをばこゝろにまかせざりけり

また、

あきはかならずおのが庵りをとふべしとちぎり給ひしが、こゝちれいならねばした
めらひてなど御せうそこたまはりける中に

あきはぎのはなのさかりはすぎにけりちぎりしこともまだとげなくに

「こゝちれいならねば」とあるのは、良寛が天保元年（一八三〇）七十三歳、老衰に加え、秋頃から痼病にかかったことを言い、病状が進んで年末には危篤状態に陥るのである。それまでも、貞心はたびたび病床を見舞い、懇ろな看護にあたったが、『はちの露』から、その状況のうかがえる歌をあげてみよう。

その後はとかく御こゝちさはやぎ給はず、冬になりてはたゞ御庵りにのみこもらせ給ひて、人にたいめもむつかしとて、うちより戸さしかためてものし給へるよし人の語りければ、せうそこたてまつるとて

貞

そのまゝになほたへしのべいまさらにはばしのゆめをいとふなよきみ

と申しつかはしければ、其後給はりける、こと葉はなくて

師

あづさゆみはるになりなばくさのいほをとくでてきませあひたきものを

「あひたきものを」——この純一無飾の表現に、良寛の切ないまでの希求の声を聴く思いがする。

かくてしはすのすゑつかた、俄におもらせ給ふよし人のもとよりしらせたりければ、打おどろきていそぎまうでて見奉るに、さのみなやましき御氣しきにもあらず床のうへに座しゐたまへるが、おのが参りしをうれしとやおもほしけむ

いついつとまちにしひとはきたりけりいまはあひ見てなにかおもはむ
むさし野のくさばのつゆのながらひてながらひはつる身にしあらねば

この「いついつと」の歌は、良寛と貞心との出会いの至妙境を、われわれに示してくれているよ

うに思う。一度読んだら、決して忘れることのできない歌である。そして、いつからか、この歌のもつこれほどの魅力の拠って来る所が、「きたりけり」の「けり」にあるのではないかと思うようになり、それを手がかりに、この歌の真意を探ってみようと思ふようになった。

そこで、いつもお世話になっている『岩波古語辞典』に当たってみることにする。(今は平成二年の補訂版による) まず、基本的な「意味」として、つぎのように説明する。

「けり」は、「そういう事態なんだと気がついた」という意味である。気づいていないこと、記憶にないことが目前に現われたり、あるいは耳に入ったときに感じる、一種の驚きをこめて表現する場合が少なくない。それ故「けり」が詠嘆の助動詞だといわれることもある。しかし「けり」は、見逃していた事実を発見した場合や、事柄からうける印象を新たにした時に用いるもので、真偽は問わず、知らなかった話、伝説を伝聞として表現する時にも用いる。

さらに、「語源」についての説明があるので、それも紹介しておく。

「来有り」の転であるという説がおそらく正しいのであろう。「事態の成り行きがここまで来ている」と今の時点で認識するという意味が「けり」の基本であり、また「来(き)」と「あり」の複合の音韻変化 (kari → ke ri) も極めて無理なく説明できるからである。

間然するところのない解説がつづく。

それでは、このような意味を持つ「けり」が、この歌ではどのような働きをしているだろうか。そのことをもう少しくわしく吟味してみることにする。

「いついつと待ちにし人は」には、来ることを約した人を待つ思いの一途さ、切なさ、このほかには表現のしようがないことを思わせるものがある。外ならぬその人は、今自分の前に姿を現わしたのである。それを確認した喜びと安堵感を、「きたりけり」で、ぴたりと言い止めたのである。下の句の、今はこの世に思いのこすことはないという法悦境は、そこからおのずからに導かれてくる。

ついでながら、「きたりけり」には、「来りたり」「来たり来たり」などの異文が伝えられている。斎藤茂吉は、『良寛和歌集私鈔』（斎藤茂吉全集の第二十二巻所収）で、この歌を取り上げる時、『蓮の露』（茂吉の表記に従う）の伝える本文の「きたりけり」を避けて、一本の「来たり来たり」に従うとして、「貞心尼の訪問に際して、『来[◎]たり来[◎]たり』といふのはいかにも自然であり、又予の好きで好きでならないところであるからである」としている。この本文の選択はいかにも茂吉らしいとは思ふものの、茂吉の好みが出すぎて、かえって誤りをおかしていると思う。茂吉のようにとると、「来たり来たり」で、良寛は雀躍りせんばかりに歓喜していることになる。それでは、下の句は浮いたものとなって了うであろう。私の尊敬する茂吉ではあるが、この歌の解

釈に限り賛成することができない。いわずもがなのことながら記しておく。

○

良寛と貞心尼との歌の贈答、とりわけ病気が重くなった最晩年のそれに、単なる師弟の心の交流以上のものを感じる。さりとて、茂吉のように、「性の分別の尊さ」(前記書)という觀念を導入しても、それだけでは納得のいかぬものが私にはある。ここで、思い合わされるのは、良寛が二十二歳の時、円通寺の国仙和尚に従って故郷を離れる時のことを詠んだという長歌のことである。そのなかで、別れに臨んで、父から頂いた「いつくしきみ言葉」とともに、母からは、「むつまじきみ心」を頂戴したとある。母のその「み心」にそむくまいと念じつつ、「つねあはれみの心もし うき世の人に むかひつれ」とあるが、この信条は、良寛の一生を通じて守り通されたことを、ここに改めて思うのである。しかし、今は、良寛と貞心との関係に限定してみてゆくことにする。

最晩年の重病に喘ぐ良寛の前に現われた貞心尼が、「むつまじきみ心」の持ち主であった母その人に見えてきたのではなからうか。二人の間に取り交わされた歌を繰返し読むうちに、そうとしか考えられないという方向へ、私の想像が駆り立てられていった。茂吉のいう「性の分別の

尊さ」という観念の導入を、あえて否定はしないが、ここは、わが生の根源としての「母性」が貞心の姿をとって目前に現われた、と良寛がごく自然に感得したのではないか。この想像は、日増しに真実味を帯びてゆき、いつしか確固たる事実として、私の内部に動かしがたいものとなつていった。

十七年振りに越後に帰ってきた良寛が、郷本海浜の空庵に仮の宿りを定めた事が、さきに私が想像したようなものであったとしたら、死を間近にひかえた良寛と、若く美しい貞心との出会いに、このような事実を想定することは、極めて自然な成り行きであると思うのである。

(平成三・六)